

Title	田郷虎雄「印度」とその後：懸賞作家と戦争と文壇と
Sub Title	
Author	和泉, 司(Izumi, Tsukasa)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2007
Jtitle	三田國文 No.46 (2007. 12) ,p.25- 42
JaLC DOI	10.14991/002.20071200-0025
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20071200-0025">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20071200-0025</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 田郷虎雄「印度」とその後

―「懸賞作家」と「戦争」と「文壇」と―

和泉 司

## 一 「改造」懸賞創作当選作としての「印度」

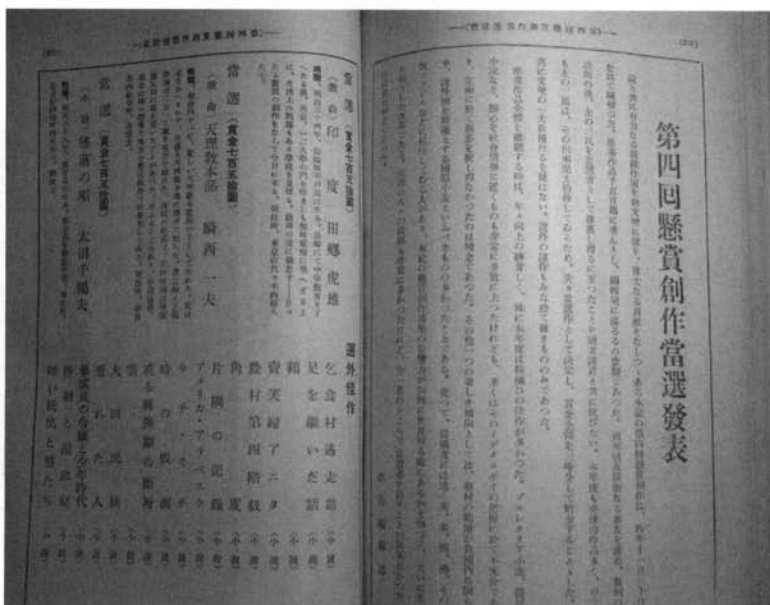
田郷虎雄の戯曲「印度」は、一九三一年四月号の『改造』に掲載された。このテキストは、発表前年にインドで起きたインド独立運動家・ガンジーによる「塩の行進」事件<sup>1)</sup>を背景とした、イギリス支配下のインドにおけるインド人の悲劇を描いたものである。この時、『改造』は、「第四回懸賞創作当選発表表」を行っており、「印度」はその際の当選作三作のうちの一つであった。

一九二八年、『改造』創刊十周年記念の企画として始まった『改造』懸賞創作は、一等千五百円、二等七百五十円という、純文学を対象とした懸賞小説としては異例の高額賞金を出し、かつ当選作が当時の文芸テキスト発表メディアとして『中央公論』に並ぶ権威を持っていた『改造』に掲載されることもあり、非常に注目されていた。二八年の第一回懸賞創作において、モダンニズム文学、新興芸術派の中心的作家として活躍することとなる竜胆寺雄を輩出し、第三回懸賞創作で元エリート官僚であり、豊かな国際経験を背景としたテキスト「ブルジョ

ア」を投稿した芹沢光治良を見いだした段階で、『改造』懸賞創作の地位は固まり、多くの投稿作と注目を集めるようになった。田郷虎雄が「印度」によって入選したのは、このように『改造』懸賞創作の「文壇」における地位が確立した段階だった。

「印度」と同時に当選した騎西一夫「天理教本部」(同年五月号掲載)、太田千鶴夫「墜落の唄」(同年六月号掲載)は、全二等当選で、賞金も均等に七百五十円ずつであった。全十回におよんだ『改造』懸賞創作の中で、一等当選となったのは先に挙げた竜胆寺と芹沢のみで、その他は一等なしの二等当選ばかりである。

第四回に入選した三作は、全て二等で同列の立場ではあるが、実際には、二等の中にも序列があったと思われる。単純に見ても、当選発表と選考評、当選作名が発表される四月号に同時に掲載されるテキストが二等中の「第一席」で、五月号、六月号と後の号に掲載される者の方が席次が低いと見なされることは避けられないからだ。その意味で、当選発表と同時に掲載された「印度」は、第四回懸賞創作における「第一席」である



『改造』第四回懸賞創作当選発表表（一九三一年四月号）

に違いなかった。

そして、「印度」が事実上の二等第一席であることが、「改造」懸賞創作の傾向を表してもいた。

第一回に竜胆寺が登場し、「文壇」において華々しい活躍を続けたことで「改造」懸賞創作の認知度は高まっていた。竜胆寺の当選作「放浪時代」は、プロレタリア文学が隆盛を誇っていた時期に、既存の「文壇」の情勢にとられない奔放に都市文化を謳歌するテクストであるとみなされた。このことが、「改造」懸賞創作に対して、プロレタリア文学の圧力や「文壇」とのしがらみのないところで、「自由な表現ができる〈場〉」としてのイメージを与えた。

そして、第三回に芹沢光治良が、スイスの結核療養所を舞台とし、そこに集まるヨーロッパ各国からの患者・家族そして反政府運動家とスパイたちとの錯綜を描いた「ブルジョア」で当選し、それが芹沢個人の経歴（東京帝大卒・農商務省勤務・パリ遊学）も相俟って高い評価を呼ぶことになった。また、「ブルジョア」の背後で震えしまったが、同時に二等当選を果たしたテクストもまた外国を舞台とした、シベリア出兵を扱った大江賢次「シベリヤ」であったことが、海外を舞台にしたテクスト・国際情勢を反映したテクストが選考に残る可能性が高くなったのである。

そのイメージが実際に信じられていたことが、「印度」が当選した第四回の選考評に現れている。

著しき傾向としては、取材の範囲が我国内に限らず、諸外国を舞台とする国際小説といふべきもの多かつたことである。従つて、投稿者には遠く英、米、独、仏、その他ブラジルなどに居住してゐる人があり、本社の懸賞創作の影響力が如何に世界至る処にあるかを知つて、大いに意を強うした次第である。

このような選考評と同時掲載されたテクストが「印度」であつたとき、『改造』懸賞創作は、海外のよく知られていない事例をテーマに取り上げると、当選しやうい」という「傾向と対策」を読者―投稿者予備軍が読み取つたことは想像に難くない。そして実際、第五回の懸賞創作で二等当選になつたのは、朝鮮半島出身の張赫宙による、日本統治下における朝鮮人労働者の悲惨な状況を描いた「餓鬼道」であつた。このことは『改造』懸賞創作の「傾向と対策」を読者―投稿者予備軍に確信させたことであらう。

一方、懸賞当選によつて登場した〈懸賞作家〉は、既存の〈文壇〉登場ルートである作家への弟子入りや学閥等を背景とした同人誌活動を経ていないことで、「金目当て」で文学活動をしている人間であるという強い偏見にもさらされてきた。先述の芹沢は、戦後の回想の中で、林芙美子に言われた話として次のように語っている。

（林芙美子は―引用者）私が「改造」の懸賞によつて文学の世界にはいつたことは、文壇人から或る種の軽視を受

けているので、生涯の損失であるから、それだけに文壇人と親しむように努力するべきだと、熱心に幾度も忠告した。それには、家にこもつていないで、街に出て、文士の会合に出席するのは言うまでもなく、文士の集る酒場にも行つて、気軽につきあうようにと言ふのだつた。

紅野謙介は、明治後期においてすでに「懸賞小説の時代」が到来してたと指摘しているが、それを紅野自身が「投機としての文学」というタイトルでまとめているように、懸賞を目指すという行為は「投機」としてとらえられ、「金目当て」に文学活動を行うという意味において、〈文壇〉の蔑視から逃れられなかつた。あるいは、当選作家自身が、「自分は蔑視されている」という意識から逃れられなかつたとも言えるだろう。

田郷虎雄は、そのような〈懸賞作家〉の有り様を典型的に示している作家でもある。田郷は、第三回までに偏見を帯びつても権威を確立した『改造』懸賞創作の、その確立直後に、最も「傾向と対策」に寄り添つた形のテクストによつて懸賞当選を果たした。そしておそらく、そのことが、田郷の作家としての成功と破綻と、その両方へと導いていくことになるのである。

本稿では、この田郷虎雄の「印度」によるデビューと、その後を追う。田郷は「日本近代文学史」の上では、現在までほとんど注目を集めていない。しかし実は、彼の名前と存在は、一九三〇年代から四〇年代にかけての〈文壇〉で、多く見つけることが出来る。それは「演劇史」や「少女小説家」として、そして、拓務省派遣の大陸開拓ペン部隊の一員となり満州視察を

して以降急激に傾斜する国策作家としての田郷の姿である。

四五年八月の日本敗戦以前までの状況でとらえるならば、田郷は『改造』懸賞創作当選作家という出発点から、比較的順調に活躍の場を広げることが出来たと言える。そしてそれは、『改造』懸賞創作に当選しながら、程なく『文壇』から姿を消していった作家の方が多かったことを考えると、異例の展開でもあった。しかし、『改造』懸賞創作で登場し、安定した活躍をし得た作家が芹沢光治良、張赫宙程度であるとき―竜胆寺雄は、『文芸』三四年七月号に発表した「M・子への遺書」によって川端康成や菊池寛などを名指しで非難したことをきっかけに、『文壇』における自らの地位を失墜させている―田郷の「異例の展開」は、やはり最終的な「破綻」を、結果的に言えれば予見させるものでもあった。

このような田郷虎雄と、その『改造』懸賞創作当選作「印度」を読み、そしてその後の展開を追うことで、現在における「著名作家」を軸とした戦前の「文学史」理解から漏れる部分を読み取ることが出来るのではないだろうか。

## 二 なぜ「印度」だったのか

ここで改めて、田郷虎雄について説明をしておきたい。

『改造』懸賞創作は、応募に際して「略歴」も付すことを要件としている。田郷が「印度」当選に際して記した「略歴」は、次のようなものである。

を了へたる後、出京、一二大学の門を叩きしも無味乾燥に堪へざる上に、生活上の問題もあり学校を見切る。戯曲の道に精進す―片々たる数編の劇作をなして今日に至る。現住所、東京府代々木西原九六七。

この「略歴」は情報が少なすぎるので、もう少し説明を加えておきたい。

田郷虎雄は一九〇一年に平戸町長・田郷直礼と妻マスの次男として生まれた。長崎師範学校を卒業し、佐世保市の小学校の教員として働いた後、一九二七年に母、妻、娘を連れ、兄を頼って上京した。上京後はまた小学校に勤務しながら、戯曲執筆を続けていた。この間、少女雑誌や演劇雑誌などに戯曲を掲載されているらしいが、彼のデビュー作として認識されているのは、『改造』懸賞創作に二等当選となった「印度」である。

その後、『改造』『文芸』に数作の戯曲を発表したが、一方で飛鳥清彦の筆名で『少女の友』に多くの少女小説を発表するようになる。また、改造社系の雑誌から離れていくあたりから、国策劇、特に満州開拓移民を称揚する「素人演劇」の戯曲を数多く発表していくようになり、その過程で戯曲が公演されたり、ラジオドラマ化されたりした。<sup>(5)</sup>

戦後、国策協力に走ったことを恥じる文を公表し<sup>(6)</sup>、少女小説家として活動を再開したが、一九五〇年に死去した。<sup>(7)</sup>

田郷は、「印度」の当選以前に、演劇雑誌『舞台』『舞台戯曲』に作品を発表しているという。また、やはり「印度」当選前に、『少女の友』『少女倶楽部』に戯曲を発表したとある。<sup>(8)</sup><sup>(9)</sup> さ

明治三十四年、長崎県平戸島に生る。長崎にて中等教育



【改造】一九三一年四月号表紙

らに、田郷が「文芸」三四年二月号に寄せた随筆「印度」を書き「何とか文藝連盟といふ投書雑誌に五回ばかり戯曲を投書して、五回とも佳作で没になった。」と述べている箇所もある。

このように、田郷は「印度」当選以前に、既に商業誌上にテクストを発表していたが、にもかかわらず、彼は「新人」として、「改造」懸賞創作でデビューしたことになるのである。あるいは「演劇史」や「少女小説史」といった立場からの把握によれば、違った評価が生じるのかもしれないが、ともかく、少ないながらも存在している田郷についての言及は全て、彼のデビューを「改造」懸賞創作の「印度」としている。このような傾向は、田郷のみではなく、「改造」懸賞創作当選者全

般に見られる。

そこには、「デビューは「改造」である」と語ることに、当選者・受容者双方の意図の一致が存在しているであろう。つまり、「改造」という「ビッグネーム」を提示することで、作家としての存在に対する理解と位置づけが容易になるからであり、また明らかに容易になるだけの権威を「改造」が有していた／いるということを示しているのである。

このように、「印度」は田郷のデビュー作として機能していくことになるが、ここで気になるのは、田郷がなぜ「改造」懸賞創作への投稿作のテーマにインドを選んだのか、という点である。

田郷の経歴上において、直接的にインドとの接点はない。「印度」を書き「印度」の中でも、「この年（一九三〇年）引用者」の夏、「印度」を書かうと思ひ立つた。」と書いてあるだけで、動機については述べられていない。

もちろん、前節で述べたように、第三回の懸賞創作発表が終わっていた三〇年の夏には、「改造」懸賞創作の「傾向と対策」として、田郷の中で海外をテーマに取り上げよう、という意識が働いていたことは想像できる。

また、一九三〇年三月頃から、先述のガンジーによる「塩の行進」事件、だけではなく、むしろそれ以上に、インド関連の記事が新聞紙面を賑わせていたことも影響として考えられる。

この頃、インド政府はイギリス製品と競合し、インド市場を侵食してきた日本綿布を閉め出すために、関税引き上げ法案を上程しており、それに対して日本政府および日本の綿布業者が一

体となつて抗議を続けていたのである。

当時の新聞紙面は、連日インド政府の動向を報じており、それはガンジーの抗議運動よりも遙かに紙幅をとっていた。

同時期に同様に紙面を占めていたのは、ロンドン軍縮会議の行方である。かつては日英同盟を結んでいた日本とイギリスは、二三年にそれが破棄されて以降、中国（特に上海）・アジアを中心とする市場の奪い合いという意味で競合状態にあった。よつて、イギリス主導で日本製綿布の締め出しをしていることが明白なインド政府の動きも、日印二国間問題ではなく、日英印の三国間問題としてとらえられていたであろう。それは、「印度」の中で在印イギリス人の描写にも反映されている。

「印度」の中に登場する在印イギリス人たちは、一様に傲慢で、インドを見下した態度をとり続けるのである。このように、当時の報道の側面から見ると、インドをテーマとしたテキストの材料は非常に多く示されているといえる。ただし、これらはいくまで傍証に過ぎない。確かにインド関連の報道が多かつたとしても、それだけが報道ではない以上、田郷がインドをテーマに選んだ決定的な証拠にはならないであろう。

ここで、状況証拠ながら、田郷とインドを結びつける線がある。それは、「印度研究家」中山利国<sup>(11)</sup>とのつながりである。田郷が三〇年に出版された中山の詩集『木犀の氾濫』に序文を寄せていることから、両者には「印度」執筆以前に交流があつたことがわかつている。そして中山は四三年に『永生の印度』というインド研究書を書いており、その冒頭には、近年、中島岳

志の研究<sup>(12)</sup>によつて注目された在日インド独立運動家のラース・ビハリー・ボースの「序詞」が書かれている。中山は三〇年代後半から日本軍部との関係を深めていく在日インド独立運動家たちとの接点があつたのである。また、中山の研究書にはボースに続いて、「印度独立連盟副総裁 デスパンデー<sup>(13)</sup>」による「序文」も載せられており、そこには次のように書かれていた。

自分が印度から派遣されて、日本精神及び日本武道の研究に渡来したのは、二十歳の時で、今から十二年前であつた。

（略）

自分が中山さんと面識したのは十一年前の四月、レインボーで戯曲『印度』の作者・田郷虎雄氏の記念祝賀会の夕であつた。

日本に来て一年程度の外国人青年が、上京して三年程の田郷と直接知り合う可能性を考えるより、中山が当時すでに在日インド独立運動家たちとコネクションがあり、青年デスパンデーは、中山を通じて田郷と接点を持っていた同じ在日インド人仲間から、田郷の祝賀会に誘われたと考える方が落ち着くであろう。『永生の印度』には、ボースの「印度脱出記」の邦訳も付されており、ボースもその邦訳を依頼して「十年」経つていと述べている。一九一五年に亡命してきたボースと中山は三〇年代前半にはつながりを持つていたのである。

このように考えると、「印度」の物語が、未だインドにおけるイギリス支配の動揺は感じられないこの時期に、インド独立運動の高揚とイギリス統治批判を軸としたテキストとなつていくこともわかりやすくなる。つまり、物語内容に、在日インド独立運動家の意図が反映されている可能性が高いのだ。

「印度」におけるインド描写や解説は非常にインド人の立場からの観点であるが――詳しく、それが「改造」懸賞創作に当選した大きな要因であると考えられる。その意味で、「印度」は第三回の「ブルジョア」と「シベリヤ」以降に確立した「改造」懸賞創作の特徴を象徴しているテキストであると言える。そして「印度」のそのような特徴は、もちろん田郷本人の情報収集や調査の結果でもあるが、同時に在日インド独立運動家からの情報にも、大きな部分で頼つていたと考えられるのである。

『改造』側がこのようなテキストを要求していたことは、『改造』の編集者であった、佐藤績が、三五年一月号の『文芸通信』に寄せた「創作募集の経験から」の中で、次のように述べていることからわかる。

先づ第一に、応募作品は内容形式共に独自のものであつて欲しい(略)応募作は毎年あらゆる地方から集まる遠くは南米、北米、伊太利あたりからの在留邦人からも来る。

其れ故、素材或ひは地方色と言つた点から見ると、実に捨て難いと思はれる変つたものや面白いものがある然しこれ等の中の多くの作品が、佳作には入るが当選には達しない

場合が多い。その原因はやはり題材を芸術作品に作り上げる修練の不足に在ると見ねばならないのだらう。斯んな特異な題材が――と思ふと、実際惜しいことがある。

「斯んな特異な題材が――」という言葉は銜いがなさ過ぎる分、『改造』編集側の本心を吐露していると言えるだろう。同じ文の中で、佐藤は「東京其の他の内地の都会からの応募作品が技術的には非常に秀れても内容は心境ものや模倣的なものが多い」とも述べており、『改造』の海外偏重の姿勢は容易くうかがい知れる。

しかし、単に海外の「特異な題材」を描くだけで当選できる程、『改造』は甘くはない。「ブルジョア」も「シベリヤ」も、共に作家本人の海外経験を背景としたものであり、「印度」以降に海外を扱った当選作も、ほとんどが自らの海外経験を元にしている<sup>15)</sup>。つまり、「特異な題材」を描くためには、相応の経験に基づく「リアリティ」が要求されていたと言える。そのように考えると、「印度」当選時点では日本内地から出たこともなかった田郷の「印度」に「印度研究家」中山利国や、在日インド独立運動家といった「ブレン」がついていたのは当然のことなのかもしれない。

### 三 「印度」と同時代言説

では、実際に「印度」のテキストに具体的に当たり、その構成の中から、「印度」の様々な特徴を見つけてみたい。

「時 一九三〇年三月より五月に至る」「所 印度(ボンペイ





「印度」一頁目

市その他」という前提のもと始まるテキストの第一景冒頭は、「土人街の一角」であり、そこでは「蛇使い」「ベンガルの踊子」「裸の男」「跣の娘」「牛糞の焚物を売り歩く女」などを背景に登場させるよう指示があり、それを「凡ては熱国印度の蒸せるが如き街頭風景」のための演出となっている。このようなインドに対するイメージは、かなりステレオタイプ化したものである。そしてそれは、在印イギリス人達のインド人に対する傲慢な姿勢、その「手先」としてインド人人夫を虐待する現場監督、インド人の無力と貧困を嘆く青年人夫などの描写にも現れている。

先に述べたように、このテキストの物語は、ガンジーの「塩の行進」事件を背景にし、それに合わせてインド独立運動に関わるようになるインド人青年・メータを主人公にしたものであ

る。メータは自宅に回教徒の運動家・イマール・サヘブが警察に追われ逃げ込んで来たのをきっかけに、サヘブに代わりガンジーの「平和的ハルタル（ストライキ）」の呼びかけを行おうと家を作る。しかし、ボンベイ州知事に従うインド人現場監督・アプデウラ・セスに捕まり、州知事の下へ連れて行かれる。

メータの兄・ポラークは、ガンジーの呼びかけで第一次世界大戦へのイギリス軍への協力として行われたインド人部隊に参加し戦死しており、父は一九一九年のローラット法に対する抗議運動の際に起きたアムリトサル事件でイギリス軍に殺害されていた。ここで、この父・ポラークは、アムリトサル事件の首謀者の一人でインド人にとって大きな影響力をもった人物とされ、州知事はその息子であるメータを洗脳し、イギリス寄りの「国民議会の自治議会の自治党員の仕上げ」「国民義勇隊やスワデシの切崩しをさせ」ようと企てるのである。

このように、「印度」には、一九三〇年三月までの段階におけるインド独立運動の経緯やそれに関わる事件が、メータの経歴に関わらせる形で強く反映されている。それらは詳細で史実的にはかなり正確なものとなっている。ただ、そのために、例えばメールやポラークの死についてはメータの母親と妹・スワダの会話の中で語られるのだが、教育的背景が豊かとは思えないメータの母親が、第一次世界大戦へのインド義勇軍の参戦過程やアムリトサル事件の経緯などについて非常に詳しく語るなどの不自然さを引き起こしている。このテキストではインドに関わる状況説明が優先され、そのために登場人物像形成を犠

牲にしているのである。

一方、ボンベイ州知事とその妻、娘セエラ、セエラの婚約者で西印度会社専務ヘンリーという形で現れる在印イギリス人像は、全くオリエンタリストとして描かれる。ヘンリーの「奴等（インド人のこと）引用者」は甘つたれの低脳児見たいに、お菓子を与へれば果物をくれ、果物を与へれば洋服をくれ、洋服を与へれば——いや、奴等の欲望は、奴等の胃袋のやうに無制限ですよ。」「印度には元來歴史がありません。伝説があるだけです。」「釈迦を生んだ印度！ 蓮の花の印度！ ウパニシャツトの印度！ さては又、タヂ・マハールの白玉の靈宮……詩そのものですよ。実に印度は東洋の光ですよ。」という発言や、セエラの「印度人が一番美しく見えるのは、白い木綿を腰に纏うて、ターバンを頭に巻いた、あの半裸体の姿ですよ。あの素朴の中にこそ印度人の美しさはあるんだわ。」「それあ欧州人に見えるやうな、シンメトリカルな美しさはないかも知れませんが。ただどあの極彩色の服装は童話風な東洋の芸術よ、東洋の夢よ。」などという発言に、それは顕著に表れる。

同時に、ヘンリーの、「ガンヂーが国産愛用を宣言してからといふもの、完全なポイコットを食つちまひましてね。」「（綿布関税引き上げ案に関連して）引用者 尤も関税引上の効果は観面に現れて、日本の対印綿布輸出額は俄に激減しました。処が日本綿布排斥に成功したのは結構でしたが、同時に英国綿布も打撃をうけてね（後略）」という台詞には、三〇年三月（四月当時の綿布関税引き上げ問題が投影されている。

このように、インド情報の投影が激しい一方で、人物像の形

成は単純化され、物語の展開も平板化してしまっているのである。

そしてそれは、ガンジীর描かれ方にも現れる。

ガンジীরはテキスト中に三度登場している。「塩の行進」の呼びかけの場面と、行進が終わり、ダンデー海岸で製塩を始める場面、そして三〇年五月にインド政府に逮捕された後、牢獄で紡車を回している場面（これがテキストの最終場面となる）である。

このとき、ガンジীরは民衆への訴えかけ以上の台詞はなく、その内面については全く描かれない。偉大な独立運動家であり、聖人としてのガンジীর像が守られるのである。

では、そのようなガンジীর像はいつ頃生まれたのであろうか。

ガンジীরは一九二〇年代前半から日本でも頻繁に紹介されるようになる。特に、ロマン・ロランとの交流などによって注目<sup>(18)</sup>され、後には、共産主義の暴力革命の対比軸として、ガンジীরの立場はレーニンと並べられるようにもなっていた。

例えば、鹿子木貞信・饒平名智太郎の『ガンヂと真理の把持』（改造社 一九二二年）には、次のような記述がある。

レーニンの提唱する暴力革命と、ガンヂイの首唱する平和革命は真に世界に於ける二大驚異である。レーニンも半ば飽かれ、米国の資本主義も峠を越えやうとして、すべての政治が新彩を失つて来たとき、突如としてマハトマ・ガンヂイの颯爽たる名が我々の耳朵にけたたましく響く、そして彼に率ゐらるる印度の非共同運動に対しても多大の興

趣を唆らるるやうになり、(後略)

哲人としての彼は古のソクラテスにも比すべく、革命の風雲児としてはレーニンと並び称せらる。

また、三〇年には、レーニンとガンジーを並べて論じたフェルップ・ミラーの『レーニンとガンジー』が、アルスから翻訳出版されていた。つまり、ガンジーは危険思想であった共産主義に対するアンチヒーローとなり、また、アジア民族運動のリーダーとなったという意味で、日本帝国にとっては比較的無害な思想家だったのである。

同時に、ガンジーは極端に「キャラクター」化されもした。ガンジーは、菜食主義者の聖人であり、常に裸体に腰巻き、裸足で紡車を回して糸を紡いでいる人物と表象され、新聞などで写真が公開される場合はいつもそのような姿のものばかりとなった。日本では、ガンジーは「長い歴史と古代文化を持つインドの聖人」として、独立運動とは切り離された形で流通していったのである。

テキスト中で、「塩の行進」終了と「同日」に起きる場面として、メータが「大印度鉄道従業員クラブ玄関前」で警官隊に射殺される様子が描かれるが、この事件も「鉄道従業員警官隊と衝突」という見出しの小さな記事として三〇年四月七日付の『東京日日新聞』に掲載されている。同日の同紙面には、「ガナー氏愈々製塩開始を断行 政府の専売法破壊の第一歩」という記事も出ており、ここでも「印度」は正確に新聞情報を取り込んでいた。これほどまでにこのテキストは「事実性」を引

き込もうとしているのである。

このように、インドに関する資料や情報を徹底的に集め反映させている点に、このテキストのこだわり、特徴が現れているが、しかしそのために、「印度」の物語内容は、集めた資料や情報を手早く配置し整理したところで、その〈体力〉の大部分を使い果たしているとも言えた。「特異な題材」を見つけ、それを創作テキストと形成する―佐藤がいうところの「芸術作品」化する―ところまでは届いたかも知れないが、「特異な題材」に押され、物語としての内容には深みは生まれなかった。

これは、この時点での「作者・田郷虎雄」の力量の問題なのかもしれないが、しかし、やはり『改造』懸賞創作の問題なのかもしれない。なぜなら、「印度」の後、特に植民地を描いた『改造』懸賞創作当選作に対しては、いわゆる「題材」頼りでしかないという指摘が続くからである。その意味で、やはり「印度」は『改造』懸賞創作の特徴の一つを、顕著に受け入れ、そして外部に示してしまったテキストとなっているのである。

#### 四 同時代評における「印度」

「印度」に対する同時代評も、そのような点を感じ取っていることがわかる。例えば、『新潮』三一年五月号のOPQ「文壇オベリスク」では、次のように書かれている。

「印度」は、作品としては、どふも整ふたものとは言へない。大へん野心的な作品ではあるし、その閃くやうな科

白の中にも作者の才気は覗はれるのであるが、どうも全体の構成の上に、破綻があると思ふ。最後の場面なども、かなり無理な感じがする上に、ずるぶん慌ただしい。読者は、もつと先きが有るやうな緊張感を以て読んで行くと、急にバタバタと片付いて、終りになつてしまふのは、少し飽つ氣ない。

野心的な題材に、取り組んで、見たが、荷が勝ち過ぎて、息がつかなくなかつた感じである。

『東京日日新聞』三月二十六日付の千葉亀雄「文芸時評 四月の雑誌から(三)」では、「現代印度の独立運動といふ大景を相当内容に立ち入つてもものに仕上げた、アンビシアスな冒険を採り上げたのではあるまいか」と、やはりその情報量については認めている。また「ガンヂイ」を「下手に英雄神に祭り上げず」とその描き方を評価しているが、「書き足りないのは、概して英人側だが、全体を通じて、どこか突き込んだ感激が手薄いし、それに新進作家らしい、激らつたる新鮮みもつと期待されてよい筈だ。」としている。

『時事新報』四月六日付の中河与一「時評(2)『改造』の作品」では、全体的に批判的なトーンで評されている。

強い作者の意志というやうなものが、此の作品の背後には欠乏してゐる。(中略) この作品には少しも偏頗な嗜好がない。(中略) 印度的なエキゾチックも案外出て来ない。この作品の特長は、特長が無いといふ事が特長になりさう

である。

「特長が無いといふ事が特長」という点に、物語としての「印度」の内容に対する不満が見て取れるだろう。そして同時に、「これだけの材料を斯くの如く整理したといふ事に就いては、並々ならぬ労を多としなければならぬ。」と、その緻密さについては評価していることでも、多くの情報の一方にある物語展開の薄さについて、結果的には批判している形になつてしまつてゐる。

ただ、片岡鉄兵も『東京朝日新聞』四月三日付「文芸時評「おれの利益」とは何か」の中で「印度」について触れているが、片岡は「今月新しい作家の力作が一つある。「改造」の懸賞に応じた田郷虎雄の戯曲「インド」だ。／田郷虎雄「インド」は多くの新派的手法、感傷的語法と、僅の童話的構成があるにも拘らず、そのは握力の強さ、配列の明透さ、主張の執拗さにおいて近頃希な力作である。」と高く評価している。「印度」が懸賞当選作として、『改造』掲載作として水準が低かつたわけではないことも確かなのであつた。

このように、「印度」は少なくとも情報の緻密さについては評価され、課題はありつつも「改造」懸賞創作の当選作として疑義を呈されはしなかつたのだが、『中央公論』三一年五月号の「文芸時評」では、小林多喜二によつて例外的に「印度」への長い批判文が掲載された。

小林によれば、「印度」は「徹頭徹尾、ピンからキリまで、印度ブルジョワジーに捧げられた賛美歌にみちみちて居り、従

つてその手先きムハンダース・ガンヂーに随喜の涙をこぼしつ  
つ、美事にその又お先棒を担いでいる」テキストであり、「ガ  
ンヂーの本当の姿を描きたいと云ふ芸術家としての最高の良心  
を感じたとするならば、直ちにプロレタリアートの立場に立た  
なければならなかつた」のだという。

やや突飛にも見えるこの批判だが、あるいは、小林は、レー  
ニンの対立軸として提示されるガンヂーに対し、思想的な反感  
を抱いていたのかもしれない。確かにガンヂーは弁護士出身で  
自身は下層階級ではなく、独立運動のためにインド人資本家と  
の提携も進めていたが、「ブルジョワジ」として批判するのは  
は矛先がずれているからだ。

ただ、一方でこの同時代評は、この時代、そして「印度」の  
欠けている視点を指摘してもいた。

更に、私は戯曲「印度」を何故このやうに取上げ、問題  
にするのかと云へば、一つは我が日本が実にその帝国主義  
的××に「××」と「××」の二植民地を持つて居り、  
「支那」とは密接な関係にあり、プロレタリア作家が植民  
地問題を取り上げなければならぬ充分の根拠と緊急な必  
要が感ぜられてゐるからである。

もう一つの理由は、昨年十一月、ハリコフで開かれた国  
際プロレタリア××作家第二回大会の「日本委員会」が日  
本のプロレタリア文学運動に対して提案した項目中に、日  
本の植民地、移民地及支那との間に緊密な関係を持つべき  
ことを要求してきてゐるからである。

われわれは、「××」を描かなければならぬし、  
「××」を描かなければならぬし、「支那」を描かなけ  
ればならぬ。

(中略)

本当の印度を、本当の姿のガンヂーを描くために、戯曲  
「印度」は書き直さなければならぬ。そして、それを書  
き直し得るものは、ただ一つプロレタリアートでしか  
ない。

小林の指摘は、今日的視点に立てば自明のことである。つま  
り、「印度」はイギリスのインド支配の過酷さを批判し、イン  
ド人の悲惨な状況を告発しているが、日本人が東アジアにおい  
て「台湾」「朝鮮」その他の植民地を持ち、そこで同じように  
帝国主義国家として圧政を敷いていること、中国本土への侵略  
を開始しているという事実は、このテキストでは無視されてい  
る。小林は、それを鋭く見抜き、批判しているのだ。

この小林の批判から、「印度」というテキストが否応なくア  
ンビバレントな二面性を持たされていることが見えてくるだろ  
う。しかし、植民地を持つ者が、他人の植民地統治を批判す  
る、ということの矛盾は、この時点では、まだ多くの日本人に  
とって可視的なものではなかつたのである。それは「印度」発  
表の直後、三一年九月に起こる「満州事変」によって、示され  
てくるものであつたのだ。

## 五 「印度」とその後

田郷は「印度」以降、三度『改造』に戯曲を発表している。「支那」(『改造』三二年三月号)・「南蛮鑄物師」(『改造』三三年一二月号)・戯曲 螟蛉子(国姓爺の孫)(『改造』三四年一〇月号)である。また、『文芸』には戯曲「猪之吉」(三五年一月号)が掲載され、随筆「印度」を書くまで」を初めとして、数回短いコメント文も残している。

ここで、この『改造』掲載テキストの変遷を確認したい。

「支那」は、「印度」と同様に時代設定が「一九三〇年」となっている。つまり、「満州事変」の前年で、その内容は、中国の各軍閥が、中国人民に対して非道で過酷な搾取を続けている様子が描かれている。この中には、「日本」の姿は描かれない。

三三年の「南蛮鑄物師」は時代物である。長崎を舞台にして、切支丹改めの際の「踏み絵」を作るように命じられた隠れ切支丹の鑄物師萩原祐佐が、家族(みな切支丹)の反対を押し切って作ったものの奉行所において切支丹と見破られ、家族共々処刑されるという展開である。これは、この十年前に『改造』に掲載された長与善郎「青銅の基督」と同じ題材を扱っている。ただ、「青銅の基督」では切支丹ではなかった萩原祐佐は、このテキストでは隠れ切支丹となっている。

三四年の「戯曲 螟蛉子(国姓爺の孫)」は、明の遺將で国姓爺として有名な鄭成功の台湾鄭氏政権の最後を描いた物語で、腐敗した鄭氏政権の中で、清朝の侵攻を忘れての醜い権力争いの様子を描いている。「南蛮鑄物師」とこの「戯曲 螟蛉

子(国姓爺の孫)」は、田郷の出身地長崎県および平戸から着想したとおもわれる。

三五年に『文芸』に掲載された「猪之吉」は現代物で、母一人子一人で暮らしていた中学生の猪之吉が、母親の情人として家にながり込んできた盲人の仙太郎を嫌う余り、母親の不在時に暴言を吐いて追い出してしまう。夜半に、自らの暴言を恥じた猪之吉が、仙太郎を連れ戻すと母親にわびるところで終わる。

田郷は「印度」当選の翌年に、似たようなテーマの「支那」を発表するが、同時期『文学時代』(三二年五月号)に「満州国」を発表している。これは清朝の崩壊から、満州国の成立までを、溥儀を主人公として描いた、「満州国建国」記念の戯曲であり、発表時にはすでに明治座で上演されているものであった。さらに、『少女の友』(実業之日本社)においては、少女小説家として地位を固めていた。

田郷は、この「支那」及び「満州国」を発表したあたりから、急速に国策的な作風に傾き始める。また、少女小説への参入もきっかけの一つとなったか、児童演劇さらに素人演劇の戯曲を手がけ始め、そしてそれらが時代背景と相まって、極めて時局的な内容のものとなっていく。

「南蛮鑄物師」や「戯曲 螟蛉子(国姓爺の孫)」は、このような田郷の新たな方向性とは全く無関係になっていく。そして、「支那」はともかく、「印度」については、たとえ日本のそれについて無関係なものであっても、植民地支配を批判する描き方について、本人が躊躇を覚えていくようになるのである。

一九四〇年に出版された、田郷の最初の戯曲集『螟蛉子』（洛陽書院）に収められた「創作ノート」の冒頭で、田郷は次のように語る。

急に戯曲集を出す気になり、ここ十余年のあひだに諸種の雑誌に発表してきた自作の切抜を、今度はじめて整理してみた、その数は——その数だけは、実に六十余篇の多きに達していた。（中略）が、さて、その中から一卷に収むべき幾篇かを選ぼうとして、とたんに私は当惑せざるを得なかつた。作の優劣に論なく、六十余篇の中の殆ど大部分がいまは発表をばからなければならぬ種類のものであることに気づいたからである。

この戯曲集の名が、「印度」ではなく、「螟蛉子」であることに注意したい。自他共に認める田郷のデビュー作は「印度」であり、おそらくもっとも高い評価を得たのもそれである。一方、書名に取られた「戯曲 螟蛉子（国姓爺の孫）」は、彼の『改造』発表作の中でもほとんど注目されていないテキストである。そしてもちろん、この戯曲集には、「戯曲 螟蛉子（国姓爺の孫）」は収められていても、「印度」は収録されていない。

田郷は続けて、次のように言う。

駄作にせよ、愚作にせよ、かつて自分が心魂を傾けつくした作に対しては、私もやはり深い愛着を持つてゐる。そ

の旧作の殆ど大部分が、当分——あるひは永久に、再び日の目を見ずして終るとすれば、私は一種いひやうのない感傷に陥らざるを得ない。

しかし、幸ひにして私は、その感傷から立ち上がるのに半日を要しなかつた。

（中略）

私はこの貧しい戯曲集に、過去の作——それらの作品の中には、ここに収めた十数篇よりは戯曲的には遙かに優れたものもないではなかつたが、それを棄てて、一昨年の大陸旅行以後の、しかも、いはゆる素人演劇風の作品の中の、特に大陸開拓精神を主題にしたものを中心にして集めてみた。（以上、傍線は全て引用者）

「デビュー作」とされている「印度」が、ここで田郷が挙げている「発表を憚らなければならぬ種類のもの」であり、『螟蛉子』所収テキストよりも「遙かに優れたもの」の中の一つであることは間違いないであろう。つまり田郷は、時局に迎合していく中で、自らの「デビュー作」を「切った」のである。

『螟蛉子』所収の戯曲はどれも満州移民奨励のものばかりである。その中で、「戯曲 螟蛉子（国姓爺の孫）」だけがずれたものとなっているが、そこにも田郷の付記がある。

ここに収めた一篇（螟蛉子）は、数年前の旧作であるが、私の本格的な戯曲のうち、——ちやうど「猪之舌」

(河出書房版・現代戯曲合同所載) その他の現代物とはまた違った行き方で、材を古い時代に借り、ある日ある時の想ひを託したものととして、作者自身には愛着断ち難いものがあるのだ、この一卷に収めることにした。(傍線は引用者)

ここに見えるのは、この唯一の『改造』掲載テキストを持つて、田郷が「本格的な戯曲」と称している点である。これは『改造』掲載テキストの中で、「戯曲 螟蛉子(国姓爺の孫)」が時局的に最も無難な内容であったから選ばれたことを示唆しているが、同時に、彼が、本来ならば「本格的な戯曲」を収録した著書を望んでいたことも推測できるだろう。それは「愛着断ち難い」という表現にも表れている。

これはつまり、田郷の国策協力が、作家として生き残るための戦略的なものであったことも示している。例えば、『螟蛉子』所収テキストは、満州移民を賛美し、それに反対する青年の両親や家族が改心していく過程を描いているが、田郷が三二年六月発行の文芸同人誌『文学クオタリイ』第二号に発表した戯曲「鎌」は、上海事変に従軍した息子を待つ老夫婦が、ただひたすら息子の無事を祈りながら戦死公報を受け取る事になった際の悲嘆にくれる様を描いている。中国へ渡ったという設定までは同じながら、それに対する評価は戦時下のそれとは正反対になっているのだ。

さらに、戦後を迎え、田郷は『嵐をくぐって来た女』に「ぎんげ(跋)」というあとがきを載せ、自らの国策協力を「懺悔」

することになるのだが、そこには、やはり〈懸賞作家〉であった故の不安が存在していたのではないだろうか。

『文芸通信』三五年三月号に掲載された、「質問 一、懸賞創作の思ひ出 二、埋もれて了つた作家」という作家への質問回答コーナーに、田郷は次のような回答を寄せている。

一、思ひ出としてなら、当選の喜びより、その後の当選作家なるが故の苦しみの方が先に立ちます。懸賞当選は勸業債券のクズに当ることとは違ふのです。それと同じやうに考へる人が文壇にはゐるのぢやないかと思ひます。

同じコーナーでは、湊邦三が「懸賞小説に応募して当選を期待することは、歳末大売り出しの福引の籤を引くやうな危険さがある、といふ考へを持つてゐました」という回答があった。田郷の「苦しみ」は、懸賞外部の人間からは「勸業債券のクズ」に当たつた程度のもつとされてしまふ。それが〈懸賞作家〉の苦悩として、田郷には映つていたのである。

先に挙げた『文学クオタリイ』は、その後『文芸首都』となるが、この同人誌は、『改造』懸賞創作第一回当選者の保高が、同期の竜胆寺雄と、『改造』懸賞創作当選者の作品発表機会の少なさを補うために創刊したものであった。『文学クオタリイ』及び『文芸首都』に『改造』懸賞創作当選者の登場機会が多いのは、このためである。同時に、『改造』懸賞創作当選者達は、「改造友の会」という当選者達のグループを結成し、戦前の改造社解散まで、会合を続けていた。



『文芸』三四年三月号に、『改造』当選者の会』という記事がある。書いたのは第二回二等当選（「死なす」）の高橋丈雄である。その中で、次のような箇所がある。

いつたい改造当選組はどうしてまたこんなにいい人ばかり偶然集つてしまつたんだらうと、太田（千鶴夫。―引用者）さんに洩らしたことがある。すると傍にゐた田郷さんの曰くには、それは応募するやうな人びとは文壇に知己先輩もたず孤りこつこつ仕事をやつて来た人たちがかりだからではあるまいか、と。真実であらう。（傍線は引用者）

田郷がいうように、『改造』懸賞創作当選者たちは、〈文壇〉でのコネクションに欠ける人々が多かつた。そして、やはり高見順が述べていたように<sup>23</sup>、「懸賞作家」は真つ当ではないという認識が、当時は非常に強かつた。それが、『改造友の会』という、それ自身が「孤りこつこつ仕事をやつて来た」ことと矛盾する集まりを持つことを、彼らに求めさせたのではないだろうか。また芹沢が回想によると、この「改造友の会」も高橋が語る程美しい集団ではなく、売れている作家・売れない作家の隔たりや、改造社編集部員との距離の取り方の問題も起きていた。しかしそれでも、そこによりつつ、作家として生き延びるために、彼らは必死であつたのだ。

田郷は『改造』から離れて作家活動を継続し得た、当選者の中では珍しい存在であつた。しかしそれでも、三九年に大陸文芸懇話会のメンバーとして満州視察に出かけて以降の田郷は、

過剰なほど国策協力に入れ込んでいった。もちろん、国策協役に積極的だったのは田郷だけではないし、〈懸賞作家〉であることと、国策協力との因果関係は薄いかもしれない。だが、田郷が〈懸賞作家〉であることに不安を感じ続けていたことが―ここには、彼が小説家ではなく戯曲作家であつたことも影響しているかもしれない―、国策に積極的に関与し、自らの作家としての地位を保全しようという意識に結びついた、という推測は、蓋然性を持つのではないだろうか。

戦後になつて、国策協力に加わつた作家の多くは或いは半生の弁を述べ、あるいは過去に触れないようにしながら、ともかく戦後の新しい〈文壇〉に復帰した。しかし、『改造』の〈懸賞作家〉の中で、戦後も〈文壇〉に残つたのはごくわずかである。その中で田郷虎雄は、先に挙げた「ざんげ（跋）」の中で、積極的に国策協力への反省を公表したが、それでも少女小説の単行本を出すことはできても、戯曲での活躍はできなかった。

このとき、田郷及び『改造』懸賞創作当選作家たちの行方には、〈懸賞作家〉であるが故の頼りなさが浮かび上がっているように思われる。田郷たちの国策協力は、もちろん批判されるべきであるが、同時に、〈戦争〉と〈文壇〉に翻弄された彼ら〈懸賞作家〉たちのありようを、改めてとらえ直す必要があるのではないであろうか。

注

（1）「塩の行進」は、一九三〇年三月に始まつた、塩の専売制への抗議をアピールするため、ガンジーが民衆とともにアフメダーバード

から伝統的な製塩地帯であるタンデー海岸まで行進し、そこで製塩法を犯し自ら海水から塩を作って見せた事件。狭間直樹・長崎暢子「世界の歴史」二十七卷（中央公論新社 一九九九年）の「8 ガンディー時代——第一次大戦終了から第二次大戦開始まで」を参照。

(2) 第八回には二等湯浅克衛「焰の記録」のほかに、規定にない佳作「三波利夫」「ニコライエフスク」が初めて選ばれ、第九回では佳作推薦（龍瑛宗「パイヤのある街」渡辺渉「霧朝」）のみが発表された。

(3) 芹沢光治良「小説家の不運」「文学者の運命」（主婦の友社 一九七三年）。ここでは『芹沢光治良文学館 エッセイ こころの広場』（新潮社 一九九七年）所収分を参照した。

(4) 紅野謙介「懸賞小説の時代」「投機としての文学」（新曜社 二〇〇三年）を参照。

(5) 公演された戯曲の中で有名なのは、三二年四月に満州国建国を記念して明治座（大阪では中座）で行われた「満州国」と、三五年三月に創作座によって飛行館で行われた「猪之吉」。ラジオドラマ化された作品については全容は不明だが、田郷「螟蛉子」所収の「父の碑」（放送日不明。新興キネマ製作・青山三郎監督「母の姿」（四一年）の原作でもある）と、早稲田大学演劇博物館に台本が所蔵されている「國の菜・物語劇」（放送…一九四一年三月二八日 A K 放送台本）と「祖母の心・ラジオドラマ」（一九四一年五月一六日 A K 放送台本）がある。

(6) 田郷虎雄「嵐をくぐって来た女」（日本出版社 一九四六年）の巻末所収「さんげ（跋）」を参照。

(7) 田郷虎雄の経歴については、『日本近代文学大事典』『田郷虎雄』の項、『日本児童文学大事典』『田郷虎雄』の項、及び志村有弘「シリーズ長崎の文人 田郷虎雄」『季刊 長崎人』二二号（長崎人文社 一九九九年）を参照した。

(8) 志村前掲評論を参照。  
(9) 注7に同じ。

(10) 松浦正孝「汎アジア主義における「インド要因」」（膨張する帝国 拡散する帝國）（東京大学出版会 二〇〇七年）を参照。

(11) 生没年等詳しい経歴は不明。著書に詩集「木犀の氾濫」（木犀社 一九三〇年）、「永生の印度」（ヒマラヤ書房 一九四三年）、「西蝦夷地日記」（田草川伝次郎著 中山利国編 石原求龍堂 一九四四年）があり、「西蝦夷地日記」の末尾には、中山を「印度研究者」と紹介している。

(12) 中島岳志「中村屋のボース インド独立運動と近代日本のアジア主義」（白水社 二〇〇五年）を参照。

(13) 樋口哲子著／中島岳志編「解説「父、ボース」」（白水社 二〇〇八年）の「解説、写真で見るボースの歩み」の章に、「デーシユ・パインデー」の項目がある。この項によると、デーシユ・パインデーは「一九三〇年代後半、印度独立連盟の中で頭角を現した人物で、講道館で練習に励む傍ら、印度独立連盟に参加し、ボースを懸命に支えた」。また、一九四一年には、日本人女性と結婚しており、その際の写真が同書に掲載されている。パインデーは太平洋戦争期に「ボースと共に東南アジアに渡ってインド国民軍の運営に当たった」という。一九四三年、乗船した日本へ向かう船が撃沈され死亡したという。インド人姓名の日本語表記は非常にまちまちだが、この「デーシユ・パインデー」が「デスパインデー」であることは間違いないであろう。

(14) この佐藤の文章については、中根隆行「『朝鮮』表象の文化誌」第七章「地方としての朝鮮、上京する作家」を参照した。

(15) 第三回の「シペリヤ」大江賢次は、略歴では満州からシペリアに放浪したと述べているが、実は満州里まで行って引き返しており、シペリアには行っていなかったことを、戦後の回想記（「アゴ伝」新潮社 一九五八年）で告白している。第五回は朝鮮人作家の張赫由「餓鬼道」。第六回「等当選角田明」「女碑名」はパリを舞台とした小説で、角田はパリに留学経験があった。第八回「等当選湯浅克衛」「焰の記録」は朝鮮半島を舞台としている。湯浅は朝鮮半島で育ったことで有名な人物。同じく八回佳作「ニコライエフスク」の三

波利夫にソ連滞在経験はなかったと思われる（三波は三八年に三十歳で死去している）。第九回は台湾人作家の龍瑛宗「パパイヤの街」。第十回では、竹本賢三「蝦夷松を焚く」が樺太を舞台としているが、略歴によれば、竹本は「昭和十三年樺太全島を散歩」と述べている。

(16) おそらく、「国民会議」の誤りと思われる。テキスト中では、すべて「国民議會」と書かれている。

(17) スワデシ運動は国産品愛用運動。主にイギリスからの輸入綿製品をポイコットし、インド産品を用いることで、イギリス系企業ひいてはイギリスの統治に打撃を与えようという運動。長崎前掲書を参照。

(18) アルスから、一九二三年にロマン・ロラン『ガンジー論』の形で出版もされている。一九二〇年代は、これに限らず、多くのガンジーに関する書籍が出版されている。

(19) 上林暁「ガンヂイ」（『作品』一九三三年三月号）では、語り手「私」の妻が、病氣入院を機に「自然のまま」「菜食主義者」「時々断食をやる」という点でガンジーを「信仰」するようになる様子が描かれている。このとき、「私」が妻に頼まれ買ってきた古本が「レーニンとガンジー」で、妻は「寝床に入ると、レーニンの項などには目もくれず、ガンヂイのところだけを食るやうに読みはじめるのである。

(20) 長崎前掲書を参照。

(21) ボースは、日本人の自らへの援助に感謝しつつも、二〇年代を通じて、日本の中国侵略姿勢を批判していた。しかし満州事変以降、その方針を転換してしまう。中島前掲書を参照。

(22) 国立国会図書館に所蔵されている田郷の少女小説単行本は、戦前のものだけで十二冊に上る。田郷の少女小説テキストの全貌は明らかではないが、国会図書館にも治められていない単行本も数作確認できる。

(23) 高見順『昭和文学盛衰史』（一九五八年）ここでは講談社文庫一九八七年版を参照。

(24) 芹沢前掲書「改造友の会の頃」

(25) 戦後五年で死去した田郷に、もしもう少し時間があれば、戯曲家としての復帰もなかったかもしれない。「悲劇喜劇」五〇年十月号には、遠藤慎吾と西沢揚太郎による「田郷虎雄のおろふいる——追悼」という記事が寄せられている。死去後ではあるが、ここで田郷は戯曲家として追悼されていた。